

「地域学総説」の挑戦 2

柳 原 邦 光

The Challenges of Teaching the Theory of Regional Sciences: Part II

YANAGIHARA Kunimitsu

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）第4巻 第2号 抜刷

REGIONAL STUDIES(TOTTORI UNIVERSITY JOURNAL OF THE FACULTY OF REGIONAL SCIENCES)Vol.4 / No.2

平成19年11月30日発行 November 30,2007

「地域学総説」の挑戦 2

柳原邦光*

The Challenges of Teaching the Theory of Regional Sciences: Part II

YANAGIHARA Kunimitsu

キーワード：地域，地域学，地域づくり，コミュニティ，文化的個性，生の充実，地域の文脈，経済的合理性と地域政策，生活の質，教育，創造都市，創造階級，創造経済

keywords : region, regional sciences, community development in a region, community, cultural character of a region, a satisfying life, regional context, economic rationalization and regional policy, quality of life, education, creative city, creative class, creative economy

はじめに

本年度は「地域学総説」がスタートして2年目である。昨年度の「地域学総説」は関係教員にとって大きなチャレンジであったが、反省すべき点も少なからずあった¹。そのうちのひとつは、2つの学年必修科目、「地域学入門」（1年）と「地域学総説」（3年）をもっと連動させなければならぬ、ということである。学生は「入門」で主に地域の実践活動について具体的に学んでいる²が、それだけでは「総説」で「地域学」を抽象的・理論的に理解するのは難しい。「入門」でも、実践例の意義や価値を理解するために理論的枠組みだけでも知っておく必要がある。逆に、「総説」では、具体例を通して理論に肉付けすることが望ましい。このような反省から、本年度は企画会議（4学科の教員10名で構成、地域学研究会会長野田邦弘教授の主宰）を設けて、ここで「入門」と「総説」の授業プランを作成することになった。「総説」自体は、これまでの成果の上に、昨年度の授業で欠けていた部分、あるいは不十分であった部分を積み上げることにした。さらに、鳥取大学地域学部教員の研究成果を市民に還元するために開催されてきた「地域学セミナー」（1年間に5回の報告、これまで2年間開催）についても企画会議が企画を担当し、これら3つの機会を通して「地域学を創る」という大きな目標の達成を目指すことになった。

以上3つの試みについての総括は別稿に譲るとして、本稿では、本年度の「総説」の成果を記録・報告し、自己評価する。また、学生が授業をどのように受けとめたかについても、できる範囲で検討する。こうした作業を行うことで、「地域学を創る」というわれわれの課題の達成状況を確認するとともに、今後掘り下げていくべき論点と課題を明らかにできると考える³。それはまた来年度「総説」のための確かな基礎をつくることにもなるであろう。

* 鳥取大学地域学部地域教育学科

¹ 柳原邦光『「地域学総説」の挑戦』（『地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）』第3巻第3号,2007年）参照。

² 2年生では、各学科で「地域調査実習」あるいはそれに類する授業を設けて、地域の現状を学生自ら調査している。

³ 本来ならば、国内外の地域学あるいは地域科学と比較して、「地域学」の位置づけをなすべきであるが、それは筆者の手にあまる大作業であるし、残念ながら「地域学」はまだ積極的に論じる段階にない。

以下では、まず、第1章と第2章で授業内容を詳しく紹介し、第3章で自己評価を試みる。「おわりに」では、学生の受けとめかたに言及して、結びとしたい。各章のタイトルは次の通りである。「1. 授業プランとその意図」、「2. 教員の報告」、「3. まとめと自己評価」、「おわりに」。

1. 授業プランとその意図

ここでは授業プランとその意図について述べる。前述したように、企画会議で「地域学入門」、「地域学総説」、「地域学セミナー」のプランを作成した⁴。「入門」と「総説」の授業では、鳥取大学地域学部の教員だけでなく、地域活動に関わってこられた10名の方に講師をお願いし、そのうち8名の方の講演を「地域を創る」と題した連続講演として一般公開することにした⁵。

「総説」の授業プランについては〔資料1〕「授業日程」をご覧ください。第1部と第2部からなり、その間に「番外編」として2回をはさんだ⁶。教員の講義1回とビデオをみる回である。2部構成にしたのは、地域学の理解を「具体から抽象へ」進めようと考えたからである。第1部と番外編で、主に国内外における実践活動の具体例を紹介し、第2部で、それを踏まえて地域学として理論的に考察しようというのである。

具体的には、第1部で、地域として鳥取県を例に取り上げた。まず、生活の基盤である経済構造とそれに密接に関連する行財政改革の観点から鳥取県の危機的現状と問題点を構造的に把握した(千葉報告と藤田報告)⁷。次に、このような知見をふまえて、実際の地域活性化の取り組みについて考える機会を設けた。学生を中心とした地域活動である。最後に学生によるディスカッションを行い、地域の身近な問題の解決方法を学生自身が議論し提案した。この形を取ったのは、地域に対する距離感をできるだけ埋めたいと考えたからである。

番外編は第1部の補足である。世界と日本各地の実践例から地域が抱える諸問題とその深刻さ、解決に向けた人々の奮闘ぶりを紹介した(野田教授の報告⁸とビデオ)。

次に第2部理論編である。目的は地域と地域学を理論的に理解することであるが、昨年度と同じ

4 そのための会議を2007年1月から2月にかけて3回開催し、プランと実施責任者を決定した。実施責任者は昨年度の「地域学総説」の経験があるということで、すべて筆者が担当することになった。

5 〔資料2〕連続講演「地域を創る」を参照。この講演には、市民のほかに自治体の職員や教育委員会の方が来場された。

6 教育実習で受講生のほぼ半数が出席できないための措置である。

7 【千葉報告】問題の立て方：生活の基盤は経済であるから、鳥取県の経済構造から地域の特性を捉える。要旨：鳥取県は、電気機械と食品を中心とした製造業が頑張っていたが、このところ力を失いつつある。このため、雇用者報酬と県民所得において、全国との格差が広がっている。したがって、県民の生活水準は低いはずだが、県民一人当たり家計支出をみると、意外に高い(全国10位)。生産力と所得水準が低いにもかかわらず、消費水準は高いのである。これを可能にしているのは国の制度的保障である。つまり、県民の生活水準は、県外から来るお金に支えられているのである。しかしながら、国の政策は変わりつつある。もしこのまま自力生産力が低下し、公的依存が進む中で、国の制度的保障がえられなくなれば、県民の生活水準は急激に低下することになる。鳥取県の経済構造と生活基盤はきわめて脆弱で、いまや危機的状況にあるといわねばならない。

【藤田報告】三位一体改革・市町村合併・道州制は、うたい文句とは反対に、安心・安全で生き生きとした地域づくりにはつながらない。むしろ、中心部への集中と周辺部の衰退、地方自治の危機をもたらしている。こうした状況で重要なのは、行政と住民の協同である。

8 本稿では授業内容を紹介できないが、野田教授は昨年度の総説で基調報告をされているので、そちらをご覧ください。柳原邦光「『地域学総説』の挑戦」(『地域学論集(鳥取大学地域学部紀要)』第3巻第3号, 2007年)

ことを繰り返しても生産的ではないので、まず昨年度の地域学総説の「到達点」を報告し、昨年度の授業で地域と地域学について明らかになった点を確認するところから始めた（柳原報告）。続いて、昨年度の授業で論点として浮上しつつも十分に掘り下げるには至らなかった点についての報告（家中報告、藤井報告）と、さらに、地域環境学科と地域教育学科から2つの報告（松本報告と一盛報告）を行った。というのも、昨年度は地域政策学科と地域文化学科が中心で（基調講演を行った教員は政策2名、文化2名であった）、地域環境と地域教育からの報告がなく、これら2学科の学生から批判を受けることになったからである。これでようやく政策・文化・環境・教育の4分野から地域学に迫ることができた。

最後の2回はディスカッションにあてた。ただし、1回目は5名の報告者がそれぞれの報告のまとめをするにとどめた。報告の繰り返しになったが、ディスカッションに先立って学生に報告内容をできるだけ正確に理解してもらうためである。授業の最後には、学生に次回ディスカッション用の質問を書いてもらった（整理し回答を付して、ディスカッションの際、学生に配布した）。2回目では、教員の報告と学生の質問をもとに論点を設定して、これについて吉村伸夫教授の司会で6名の教員が見解を述べた。ディスカッションの予定であったが、実際には学生の質問に答えることが主となった。

2. 教員の報告

本来ならば、前述した授業計画のすべてを紹介したいところであるが、紙数の関係上、授業の核である教員5名の報告を紹介する。本章で取り上げることはしないが、学生たちの質問は彼らの関心のありようをよく表している。これについては、司会の吉村伸夫教授の冒頭のコメントをそのまま記すことにする。質問に関心のある方は、〔資料3〕「2007年度地域学総説に関する学生の質問」⁹を参照していただきたい。

(1) 柳原邦光准教授報告「2006年度『地域学総説』の到達点」

この報告の目的は昨年度の「地域学総説」の成果を紹介することであるが、複雑な内容をそのまま提示するわけにはいかないので、昨年度のパネルディスカッションでの4名の基調報告に基づいて、「地域とは何か」、「地域学とは何か」、「地域学の対象」の3点に絞って報告した。

(a) 「地域とは何か」

最初に二つの定義を取り上げた。一つは地理学の立場からの定義である（藤井正教授報告）。それによれば、地域とは「地形や気候などの自然環境の要素と人間活動の要素とが絡み合って生まれたシステム」であり、環境・経済・社会・文化など「多様な要素の組み合わせ」の結果生まれた、独特の特性をもった空間である。もうひとつは文化に着目した定義である（吉村伸夫教授報告）。これによれば、地域とは、「人間の生活をトータルにみたときに現れてくるまとまりとその空間」、「精神的な意味での生活の質の向上という視点から考えて、どのような状態が実現しているときに満足できるのか、幸せなのかという感覚を共有している空間」である。つまり、ノーム（norm：地域の人々に共通の行動規範・振舞い方・考え方や感じ方などのこと）を含む固有の文化的個性をもった空間であり、住民を一人前の人間につくりあげてゆく「文化的装置」でもある。この二つの

⁹ 質問は以下の7項目に分類した。1. 教員の地域観 2. 地域と地域学 3. 地域：その他 4. 4学科について 5. 授業について 6. 地域と教育について 7. 地域学部と就職

定義の視点は異なるが、互いに補完しあうものとして受け止めるべきであろう。以上、「地域」とは、長い時間をかけて形成されたもので、そこに住む人々にとってかけがえのないものであるといえよう¹⁰。

次に、「地域」の空間的規模についてである。結論的にいえば、以下のようなになる。これこれの一定の大きさの空間が地域であるとは考えない。そうではなくて、どのような空間的広がりを地域として考えるかという問題は、「われわれの問題意識」や「視点」と密接に関連している。何を「地域」とするかは「われわれの選択」にかかっている¹¹。

それでは、なぜ今「地域」という言葉、視点が重要なのか。これについては2点にまとめることができる。①近代化とグローバリゼーションという均質化の波がすべてを押しつぶそうとするなかで、人々の「生の充実」、あるいは「生活の質」に関わる、失われてはならない何かがある、何らかの広がりをもった空間に共有されている何かがある、という認識である（吉村報告）。また欧州連合に典型的にみられるように、国家や国境の比重が小さくなったことによって、これまで見えにくかった結びつきが顕在化し、その存在価値が「地域」として注目されるようになったからでもある（野田邦弘教授報告）。②国家の財政破綻と「地域の自立」。戦後、日本は「均衡ある国土の発展」を目指して国主導の国土政策を推進してきた。中央政府が均衡の取れた経済的發展を実現するために、地方に対してなすべきことを指示してきた。この場合、中央と地方との関係は対等ではない。ここにあるのは、権力・権限・権威をもつ「中央」とその指示に従う「地方」という垂直的な関係である。ところが、国家の財政破綻の結果、この関係が維持できなくなり、地方は自立せざるをえなくなった。今日、「地域の自立」といわれるときの「地域」とは、垂直的な関係を前提とした「地方」とは異なる、水平的関係を前提とした概念である¹²（光多長温教授報告）。以上から、次のようにいえるだろう。「地域」は「自立」せざるをえないが、経済的・財政的な面ばかりが重要なのではない。自立するには、まずは自らの特性・文化的個性をしっかりと把握し、それを活かしていく必要がある（地域の個性と地域再生・活性化との関係）。

(b) 「地域学とは何か」

地理学的定義に立った場合（藤井報告）、地域学は次のように表現される。「地域を理解するには、それを構成している様々な要素の関係性、運動性への目配りが必要だ。これをするのが地域学である。」換言すれば、まず必要なことは、地域の個性を捉えることであり、この個性を作りあげている諸要素の関係性を明らかにすることである。さらに、地域学の役割は「地域の個性の構造やメカニズムにアプローチする方法論を文化・経済・空間・政策などの側面から提示すること、いかえれば、住民が意思決定をするために必要な判断材料にアプローチする方法、これを提示することだといえるかもしれない。」つまり、地域のあり方を決定するのはあくまで地域住民である。地域学の役割は正しい答えを提示することではなく、住民が自ら判断するための方法論を提供することである。

¹⁰ いうまでもなく、「地域」は県や市町村といった行政単位とは異なる。行政単位は人為的に設定されたもので、時々の都合に応じて変化する。「地域」の特性や文化的個性と一致しているとは限らない。

¹¹ 「われわれの問題意識と選択によって地域の意味も空間的広がりも違ってくる。」「様々な規模の空間を想定できる。小さいところではコミュニティや生活圏、大きくはアジアなどの文化圏までである」（藤井報告）。「空間の広がりには焦点化する問題次第で変わる。」（吉村報告）「どのような課題を解決しようとするのかに応じて、どの範囲を『地域』として設定するのが変わる。」（家中発言）

¹² 「地方」ではなく「地域」という言葉を使うのはこのためである。

文化に着目した場合（吉村報告）、地域学の目的は「人の生をよりgoodにすること」、「生の充実」である。このgood（よきもの）が何か、何を「生の充実」とみるかは、まさに文化の問題である。しかしながら、このような意味の文化はノームを含んでいるので、地域の人々にとって当たり前すぎて、意識されることも検討の対象になることもない。このため、地域の人々が自らについても文化的な自己イメージと客観的な「文化的個性」との間には、不可避的にズレが生じる。「生の充実」を実現するためには、まず「文化的個性」を的確に把握すること、次いで、「文化的自己イメージ」との間のズレをできるだけ埋めつつ、これを豊かにしてゆくこと、この二つが必要である。これが地域学の抱える文化的課題である。

文化政策の立場から見たとき（野田報告）、地域学の目的は、「暮らしやすく誇りのもてる地域を創出すること、自分の住んでいるところがいいところだと思えるようにすること、子どもや他の地域の人々にも住みたいと思ってもらえるようにすること」である。「実際にどうするかは住民が自分で考えるべきことで、地域学はその手がかりを提供するものだ。」ここには地域学の実践性がよく現れている。

(c) 地域学の対象

地域学の目的が「生の充実」、「生活の質の向上」に関わるとすれば、その対象もおのずと人の生に関わるすべてのことがらに及ぶ。したがって、「地域学」はそれに必要なものをあらゆる学問分野から調達しなければならない（地域学の学際性）。一例を挙げれば、地域のあり方を決めるのは住民である。これに異論はないが、こんにちでは、個人化が進み、地域にも多様な欲求や願望があるはずである。そうしたなかで、いかにして合意に至ることができるのか。こうした点を考慮すれば、住民の合意形成の仕方それ自体も地域学の考察対象になる。これは政治哲学の領分である（吉村報告）。

以上の3点からいえることは、「地域」も「地域学」もどの視点に立つのか、どの学問分野から語るのかによって、定義と理解がかなり異なることである。当然のことながら、研究対象も実に多様である。共通しているのは、地域学の目的であろうか。ここから整理ができるかもしれない。その他に現段階でできることは、それぞれの学問分野から「地域」と「地域学」について語ってもらうことではないだろうか。

(2) 家中茂准教授報告「なぜ地域学か－『地域』という分析枠組」¹³

昨年度の「地域学総説」を受講した学生の口からしばしば漏れた感想は、確かに様々な知的刺激を受けたが、それでも地域学はよくわからないというものであった。なぜわかりにくいのか？ 家中報告はここから始まった。

ひとつには方法論的な問題がある。近代科学の方法は観察対象と観察主体との分離を大前提にしている。ところが地域（学）の場合、観察主体が同時に観察対象のなかにいる。対象との間に適当な距離をとることができないのだ。

¹³ 昨年度の地域学総説で、4名の基調報告者の報告に地域の捉え方として「実態としての地域」と「分析枠組みとしての地域」との2つがあるように思われたが、それについて詳しく議論することはできなかった。それで家中准教授にはこのようなタイトルでの報告をお願いした。報告の目次は以下の通り。1. 地域学はわかりにくいのか？ 2. 定義のまえに 3. いくつかの（先行）事例 4. アカデミズムという仕掛け 5. 近代日本における学問のかたち－近代科学と市民社会論 6. 「地域学」をどのようにすすめるか？

もう一つ重要な問題がある。先の柳原報告に見られるように、地域や地域学について語る場合、まず定義づけを行い、そこから話を展開するのが、いわば学問の常道である。ところが、家中報告は定義をしない。むしろ「事実から」、すなわち地域学登場の背景から考える。「なぜ『地域』という新しい言葉、『地域学』という新しい学問が出てきたのか、そこから考える必要がある。新たな学問が登場するのは、既存の学問では不十分だということだ」(家中報告レジュメ、下線部は家中氏による。以下同様)。これは筆者(柳原)の言葉であるが、報告はこれを引用しつつ、地域学の特徴に言及する。地域学の対象である地域は、「どのような課題を解決しようとするのかに応じて、どの範囲を『地域』として設定するのかが変わる」。そこで問題になるのは、どのような課題を設定するかである(「あなたにとって解かなければならない問題は何ですか?」)。この問いかけの意味は重い。「自分にとって固有の問題発見とは、すなわち、生きていることの証」であるから、その問題を解くための「道具」は自分で作りあげなければならない。こうして「地域学についての様々な自分なりの定義が生まれる。」

このように、報告は地域学という新しい学問分野の登場とその意義を社会的・個人的理由から説き起こし、地域学の複雑さ・難しさをむしろ積極的に評価する。ある意味で難解な家中報告を筆者が正しく認識しえたか自信はないが、理解した範囲でまとめてみよう。

報告は二つの学問のあり方を提示した。近代の社会科学と「民間学」(他の諸学を代表して)である。近代の社会科学の特徴は次の文章に要約される。「社会科学の源泉が英仏の啓蒙思想にあったことを認識しておくことは、社会科学が本来的にもっているこの性格を理解する上で本質的な重要性を有している。啓蒙思想は理性を唯一のよりどころとする合理的精神の主張であり、科学的知識に最高の価値を付与する科学主義の思想である。すなわちそれは自然科学と同根のものであり、自然科学の精神において社会事象を扱うというものであった。」(富永健一、1993、『現代の社会学者』講談社：510-511頁、波線部は筆者による。以下同様)ここでは観察対象と観察主体とは分離されている。また、観察対象を捉える観察主体は理性的存在であるから、主体によって観察対象の見え方が異なるわけではない。この意味で、「自分」は存在しない。

報告は近代の社会科学を批判的に捉え、これに「民間学」を対置する。それでは「民間学」とは何か。報告は『民間学事典』(鹿野政直・鶴見俊輔・中山 茂、1997年)の「刊行のことば」(鶴見俊輔記)を引用しながらそのエッセンスを紹介する。以下は報告で紹介された「刊行のことば」を筆者なりに要約したものである。明治以降、日本は西洋近代の学問を優れたものと考え、もっぱらその学習と応用に努めてきた。その結果、明治以前の学問とのつながりを失った。そればかりか、学問になう個人の過去や未来とのつながりまでも失ってしまった。言葉を換えていえば、「人は生まれてくるやいなや問題に投げこまれ、問題を背負わされ、問題を探りあてようとし、問題と取りくむ。」ところが、明治以降の学問はこのような自分の問題から切断されている。そして学校を通して人は学問を自分の問題から切断する習慣を身につけた。「生きていること、やがて死を迎えるなかに自分の問題を探しあてることを学問のひとつの道と認めるならば、そこに育つ学問は民間学である。」「自分の生活を自分の問題の母体としてとらえ、問題を探りあて、それと取りくむことを学問としてとらえる」、それが民間学である。

報告がいわんとしたのは、自分の問題とつながった学問の必要性である。ところで、この「自分」は判断の基準をどこに求めるのだろうか。これについても、鶴見俊輔氏の言葉が引用されている。「『目安を立てる』』ということがある。今生きている状況の中で、このへんを標準にして考えてみましょうという目安。それがプラグマティズムだと私は思っている。」(鶴見俊輔、2002、『読んだ本

はどこへ行ったか』潮出版社、31頁）つまり、自分の身体や「生活語」（からだ言葉）を基準にして、生きるための「目安」を立てること、自分のおかれた状況をまず理解し、そこから問題をつかまえようとする、これが個々人の生き方の「心張り棒」である。

それでは、家中報告のいう地域学とはどのようなものなのだろうか。明らかなことは、それが2つの学問のあり方のうち後者に属することである。このことは『『地域学』をどのようにすすめるか?』という問いかけの中で、「国家の消失」（昨年度の光多報告から）、「地元学」（「ないもの探し」から「あるもの探し」へ、「調べた者しか詳しくならない」）、「生活の質を重視」、「ユーザーを意識した知識生産」、「実践の知をいかに創るか」といった表現があることからわかる。報告は最後に次のように述べて終わっている。地域学とは、『『地域』という分析枠組を設定することによって（あえて、既存の学問のなかに『地域』という問題設定をもちこんで）、これまでとは違ったふうに物事をとらえる新しい『道具』をつくらう』とするものである、と。¹⁴

（3）藤井正教授報告「地域と地域学－地域の関係性と重層性－」

藤井教授には、昨年度、地理学の観点から基調報告とパネリストを担当していただいた。本年度の報告内容は昨年度と重複する部分が少なくないが、柳原報告の（b）「地域学とは何か」で述べたように、地域を構成する諸要素の関係性・重層性は掘り下げるべき点の一つであると思われたので、再登板をお願いした。以下は、その要約である。

（a）地域とは

地域が何らかのまとまり（あるいはシステム）をもつ空間を指しているのは確かであるが、どのような視点（あるいは目的）に立つかによって、地域の意味も、空間的な大きさも、変ってくる¹⁵。たとえば、Regional Sciencesは「地域学」と訳されるが、都市のメカニズムというように、一定の空間を機能的にみて、何らかの指標（例：人口、自動車数、排気ガス量）に基づいて、現実を数値化して理解しようとする。この方法は数値で表現されるため、都市計画を進める行政などに対して特に説得力をもつ。この場合、課題設定が先で、それに応じて分析する地域の範囲を考える。また、Area Studies（狭義）は、元々、アメリカ合衆国が世界戦略という特別な目的のために設定した空間に関する総合的研究であった。こんにちでは、農業技術・祭りといった生活を支える指標の共通性から世界観を共有する、国境を越えた空間に関する研究（たとえば、高谷好一の「世界単位論」）を指すこともある。範囲の設定が先に来ることが多い。

（b）地域の構成要素とそれらの関係性

地理学では、地域を二つの要素からなるものとする。「自然環境の要素」（地形や水、植生、気候など）と「人間活動の要素」（商店、工場、住宅、水田、畑、神社、コミュニティなど）である。これらの構成要素間の関係（性）を考察した一例として、A. ベルクの研究を挙げることができる。ベルクは学位論文の研究対象として北海道を選んだが、それはヨーロッパ的な気候の大地を、非ヨ

¹⁴ 家中報告で紹介された参考文献は以下の通り。新崎盛暉・比嘉政夫・家中茂編、2005・2006、『地域の自立 シマの力（上・下）』コモンズ 現代農業2001年5月号増刊『地域から変わる日本－地元学とは何か』農山漁村文化協会 高谷好一、2006、『地域研究から自分学へ』京都大学学術出版会 鶴見俊輔、2002、『読んだ本はどこへ行ったか』潮出版社 富永健一、1993、『現代の社会学者』講談社。

¹⁵ 鳥取大学地域学部の定義は「人々が生活している空間の広がり」とそこにおける社会関係を示すものである。空間の広がりについては、コミュニティ、自治体、通勤圏、経済圏、国家、文化圏など、様々なスケールの地域が存在する。

ヨーロッパの文化をもつ日本人が、アメリカの技術を使って開拓したという点に着目したからである。ベルクは自然と人間の関係のありようを「風土」と捉え、その形成過程を解明しようとしたのである。この「風土」を「地域」と置き換えることもできるだろう。すなわち、地域とは自然と人間が絡み合って生み出したひとつのシステムなのである。さらにいえば、地域とは様々な構成要素が絡み合って空間的なまとまりをもったシステムである。したがって、絡み合いのあり方（構造）、すなわち地域の関係性を解明することが、地域学の重要な課題の一つであるといえる。

(c) 地域概念

とはいえ、分析する際には、地域のまとまりも何を基準にしてみるかによって、次の3つに概念化することができる（Blotvogel）。「実質地域」と「認知地域」と「活動地域」である。「実質地域」は市街地や水田地域、あるいは通勤圏など、実際に存在するものの分布範囲や結合関係をもとに捉えられた空間である。「認知地域」はメンタルマップやイメージマップというように、住民の意識のなかにある主観的空間で、現実の地域と異なる場合もある。「活動地域」は、都市計画地域やエリアマーケティングという言葉がよく示しているように、何らかの働きかけをしようとするときに想起される空間である。

(d) 空間スケール（地域の重層性）

空間の規模という点から地域を考えると、さまざまな規模の地域を想定できる。たとえば、環境問題には、ゴミの分別や車の利用方法のように個人で工夫できる部分と、車を利用しなくても生活できるように都市規模で対策を講じなければならない部分とがある。こうしてゴミの焼却や車の排気ガスについて有効な対策を講じることができれば、他のさまざまな工夫とその集積によって地球規模での有効な温暖化対策となるかもしれない。この場合、「個人－都市規模の地域－地球規模」と3つの空間スケールの重なり合いで問題を捉えることができるし、それぞれの空間スケールで考えることもできる。つまり、何らかの問題を解決しようとするとき（何らかの現象を解明しようとするとき）、われわれはそれに必要で有効な規模の空間を選択して、あるいはスケールを組み合わせて、考えるのである。

(e) これからの地域づくりの視点

これからの地域づくりという観点にたったとき、これまでの地域整備のように機能・効率化・経済優先だけでは十分でない。環境・経済・社会・文化など複合的な視点から「地域の文脈」（その地域に特徴的なシステム）を捉えることが必要である。上述した地域の重層性という視点も重要である。また、時間の観点から地域をみることも必要である。時間が問題になるのは、これまでの取り組み（たとえばハコモノ行政）が一定期間（建設期間）を過ぎれば顧みられることがほとんどなかったのに対して、「地域の文脈」と「良質な生活」という視点に立った取り組みは、いわば「完成予想図のないプロジェクト」であって、絶えざる努力と工夫を必要とする社会的プロセスだからである。

(f) 地域学とは

地域学の特徴をなす4つの側面がある。ひとつは、地域に関わる主体の多様性である。たとえば、研究者と学生、行政関係者、企業関係者、住民である。それに応じて地域学の形も変わる。トップダウンのものもある（国家や地方自治体などが経済政策を講じる場合）し、家中報告が提示した民間学や地元学など、住民ワークショップ、住民参画、NPO、コミュニティスクールといった形をとることもある。二つ目の側面は、対象とアプローチの多様性である。地域を構成する諸要素はきわめて多様で、アプローチも総合的・学際的なものとなる。もちろん総合は1人では不可能である

から、地域を分析する方法論を少なくとも一つは確実に獲得するとともに、広い視野と学際性を合わせもつことが必要である。3つ目は地域観の確立と共有である。この場合、実際とは異なる自己イメージをもっていても、それは本物ではないと否定するよりも、それを生み出してきた社会的プロセスを研究し、その成果を共有することが重要である。4つめの側面は、中心市街地活性化、むらおこしなど、地域で暮らす人々の住みよい暮らしを目指す地域づくりである。これらの全体像を視野に入れつつ、4側面のいずれかに関連して地域課題の解決を最終的には目指す。それが地域学としての取り組みである。

(4) 松本健治教授報告「地域と健康－とくに発育促進現象をめぐって－」

この報告は「地域と環境」との関係について学生に具体的イメージをもってもらうことを第一の目的とした。環境というとき、われわれは地球環境のようにきわめて大きな空間を思い描くかもしれない。あるいは、流域圏のような小さな空間かもしれない。鳥取大学地域学部のいう「地域」と「環境」との関係はどのようなものなのか。以下、この観点から松本報告の整理を試みる。

報告は地域を人々の健康という観点から捉えようとする。「健康」とはなにか。それは身体的な状態だけでなく、精神的、社会的、スピリチュアルな要素も含んでいる。この意味で、人間をまるごと対象にしているといえる。それでは「健康」の目指すところは何か。報告は、究極的にはQOL（生活の質、人生の質、生命の質）の向上であるという。「健康」の内容とその目的が以上の通りであるとすれば、「健康」状態は何によってもたらされるのか。一言でいえば、人々を取り巻く環境ということになるが、ここでいう環境の意味は広く、自然環境から社会的環境、経済的環境、文化的環境、家族・友人・仕事仲間といった人間関係など、実に多様な要素が複合した状態である（以下、環境はこの意味で用いる）。次に「地域」とは何か。報告では明示されていないので、推論するしかない。論理的には、環境を共有する空間を「地域」とすればすっきりするが、実際には都道府県や市町村といった行政単位にならざるをえない。というのは、後述するように、松本報告は種々の統計資料に基づく緻密な分析と考察であるが、データの集計が行政単位でなされている以上、報告もこの制約をこえることはできないからである。

報告の内容に入ろう。報告は最初に上述の地域の環境と健康との関係を説明し、続いて、健康全般ではなく、発育促進現象¹⁶と思春期をめぐらる問題に焦点を絞る。思春期に見られる問題である若年妊娠と人工妊娠中絶、また乳児死亡率が経済や教育を含めた社会状態を反映する指標であること、さらに平均寿命の動向と社会・経済状況などとの因果関係・相関関係が国別、都道府県別、市区町村別、時代別に次々と確認されていく。

報告は次に沖縄県を取り上げた。沖縄県はかつて男女とも国内最長寿県であったが、男性の場合、近年全国第26位にまで低下（26ショック）したからである。なぜこのような急激な変化が生じたのか。その社会的背景を探るべく、17歳の生徒の身長と体重および肥満指標のBMI（体重/身長²）をみると、男女ともすべて全国一低位である。ところが、成人の場合、肥満率は男女とも全国一高率である。この違いが何に由来するのかは今後の課題であるが、その背景に重大な変化があることが予想される。世界に目を移すと、日本は、肥満率が世界一低い。一方やせ過ぎ率は国民総生産の高い国々の中で最も高い。このように健康に関する値にも地域や国によって特徴が見られるのであ

¹⁶ 具体的には体格の大型化、第二性徴（初経年齢の若年化など）の早期化、思春期発育の若年化、閉経年齢の高齢化などをいう。

り、これらの原因を探ることも地域学の一領域である、と報告はいう。

続いて、報告は、発育促進現象の背景（日本、韓国、スウェーデン）や、戦争と震災が子どもの発育に大きく影響することを統計データによって論証し、さらに、発育促進現象（最大発育年齢、初経年齢）と経済発展との関連を示す例として、中国と韓国を引き合いに出す（中国の場合、山東省統計局が公表している各種の社会経済指標の年次推移の資料から著しい経済発展、急激な産業構造の変化などが読み取れる）。韓国の場合、韓国人女性の初経年齢の年次推移の動向は時代背景やGDPの増加を反映している（Hwangら2003）。具体的には、1930年代に生まれた韓国女性は遅い初経年齢（17歳代）まで、彼女らの人生で最も難しい日々を生きた。それは、日本の植民地時代後半、第二次世界大戦および朝鮮戦争（1950-1953）にあたる。一方、1980年代生まれの生徒の早い初経年齢（12歳代）は、急速に改良された栄養と生活水準を反映している可能性がある。「漢江の奇跡」と呼ばれる経済発展、1986年のソウルアジア大会と1988年のソウルオリンピックの時期である。韓国の国民総生産は1955年から2000年まで約9倍も増加している。

以上の検討を経た後に、報告は次のように総括する¹⁷。順調な発育は健康のバロメータであるが、思春期は心身の発育発達が著しく、個人差も大きいので、一時点の身体計測値から個人の健康を評価するのは慎重でなければならない。また、大災害や戦争の結果生じた大きな精神的ストレスが発育に強く影響する場合もある。こうした点を考慮に入れても、日本の子どもの発育の過去100年間の推移を見れば、大型化、若年化が明治以来の生活様式の西欧化に伴って進行してきたことは明らかで、このような動きは発育促進現象によるものと考えられる。

全体として、日本における都市人口割合やエンゲル係数の変化から読み取れるような都市主義の浸透は、子どもたちの遊びや食生活に質的な変化をもたらし、運動量も大幅に減少させた。これらの変化が生活習慣病の背景にあるが、こうした日常生活全般の変化によって、同時進行的に発育のプロファイルも変わってきたと考えられる。ところで、仔細に見ればこの現象にも地域差があることがわかる。この点に着目すれば、たとえ小さな対象地域であっても、その地域の子どもたちの最大発育年齢が全国的な若年化傾向のどの位置にあるかを確認することで、その背景にあると思われる、地域の社会経済的位置付け、あるいは、健康水準を推定することが可能になる。

結論としては、子どもたち個々人の身体計測データは、時代や地域や国の状態、とくに社会・経済状態を見事に映す鏡であると考えられる。もちろんこうしたデータから身体状況の優劣を論じ、健康度を評価しようとするには慎重でなければならないが、地域の身体計測データの動向から、その背景にある地域社会や家庭のあり方を読み取ることは可能であり、こうした試みは意義あるものであろう¹⁸。

(5) 一盛真准教授報告「地域と教育」

教育は地域とどう関わっているのか。この問題は地域教育学科の学生にとって「難問」のようである。なかには、「教育と何の関係もない地域学を、教育の専門科目で忙しい3年にもなって、なぜ学ばなければならないのか」と、憤慨をあらわにする学生もいる。拒絶反応といってもいい。これは昨年度にも見られた反応である。地域学部の地域教育学科にしながら、地域学とは無関係だという認識には首を傾げざるをえないが、彼らにとって切実な問題であるから、無視するわけにはいかない。一盛報告はこの課題に応えるために用意されたものである。

¹⁷ 以下の記述は第11回「諸報告の要約・整理」において松本教授が配布された要約に基づいている。

(a) 人間形成と教育

この節の目的は、「地域」を射程に入れない学校主義的教育学の限界を示すことである。報告は人間形成の観点から始まった。人間形成に関わる概念として、「形成」、「教化」、「教育」がある。「形成」とは、ひとが日々の生活を送るなかで、何かを無自覚・無意識的に身につける作用をいう。これに対して、目的・意識的に人格に働きかけるものとして、「教化」と「教育」がある。「教化」とは、動機が個人の内発的動機に基づかないもので、所属する社会集団の維持・再生産や改革を目的にする場合をいう。「教育」は、個人の「自立」、「人格形成」をあくまで当人の立場から介入する場合で、その時代その社会で「望ましい」とされる方向への、人間の価値的形成に限定されなければならない（価値的概念）。そして、こどもの問題状況を包括的に捉えようとすれば、「教育」（ここに学校教育が含まれると思われる）だけでなく、「形成」にまで視野を広げなければならない。具体的には、人間形成の重要なフィールドとして家族・「地域」に注目すべきだ、という。

以上を筆者は次のように理解した。ひとが社会的存在になっていく（人間形成）過程に上記の3要素が関わっている。したがって、今日必要なのは、学校という枠組みだけで考えないこと、換言すれば、学校という枠組みの外に広い意味での教育作用（ひとを社会的存在に育て上げる作用）があることを認め、家族や「地域」に目を向けるべきであると。この指摘は、近代史を専門とする筆者にはいうまでもないことであるように思われる。もちろん、学校と家族と「地域」の三者の関係は近代以降変化していくので、歴史的把握が欠かせない。これが次のテーマである。

(b) 日本における家族・学校・「地域」の関係史—学校と地域の相克から学校と家族の相克へ—

報告は、今日、「学校・家庭・地域の連携」、「家庭の教育力の低下」といわれるが、歴史的にみれば、学校・村（地域）・家族の関係は、異質な人間形成論理の軋轢の歴史であったという。明治になって、村の生活に学校が入ってきたとき、持ち込まれたのは、身体の管理、時間の管理（近代の時間意識）、子ども集団の管理である。学校には、習俗を否定し、振舞い方・考え方を改めるための装置という側面があった。この結果、「閉じた共同体慣行と非学歴主義的な労働の世界を背景とする家族の教育」と「文字学習と近代国民国家形成・維持に関わりを持つ学校教育」とが並存・対立することになった。

続いて、報告は広田照幸氏の研究に依拠して、家族・地域・学校の三者の構造変化の歴史を次のようにまとめている。自然村において、家庭教育は村の規範・習俗から独立したものではなかった。ここにあったのは主として労働に関わるしつけであり、伝統的な教育の担い手は若者組や子ども組

18 なお、講義の要点は次の通りである。 1.地域診断の目的と過程（飯田ら1999） 2.地域学の1領域：自然的・社会的環境要因と健康、生活の質（QOL）との関連を探求 3.地域学部4学科の専門性とプリシード・プロシードモデル（Greenら2005） 4.児童の健全な発育は、基本的重要性を有し、変化する全般的環境の中で調和して生活する能力は、このような発育に欠くことができないものである。（WHO憲章前文） 5.発育促進現象と思春期をめぐる問題 6.若年妊娠と人工妊娠中絶、乳児死亡率は経済や教育を含めた社会状態を反映する1指標 7.平均寿命の動向とその因果関係・相関関係（国別、都道府県別、市区町村別、時代別） 8.地域の変化と課題を探る例として沖縄県の子どもの発育、成人の肥満率など及び世界各国の肥満率とやせ過ぎ率 9.わが国における子どもの発育の過去100年間の推移から大型化、若年化を提示 10.発育促進現象の背景（日本、韓国、スウェーデン）、戦争と震災が子どもの発育に影響 11.中国と韓国の発育促進現象（最大発育年齢、初経年齢）と経済発展（山東省資料例示） 12.韓国人女性の初経年齢の年次推移の動向は時代背景やGDPの増加を反映している（Hwangら2003）日本の植民地時代後半、第二次世界大戦、および朝鮮戦争（1950-1953）、漢江の奇跡と呼ばれる経済発展、1986年のソウルのアジア大会と1988年のソウルオリンピック。

などの年齢階梯集団、近隣や親族のネットワークであった。ひとびとは労働や儀礼への参加を通じて学んだのである(村の人間形成機能)。こうした状況に学校が入ってくるが、学校の影響力はしばらくは小さなものにとどまった。ところが、明治後期から戦後復興期にかけて、三者の関係は大きく変化する。学校は、子どもを通して、また社会教育やPTAへの働きかけを通して、村と家族を変えていく。「遅れた村」・「無知な親」と「進んだ学校・教員」という言説が登場し、村の伝統的な人間形成原理と学校の原理との相克が生まれる。高度経済成長期になると、村の伝統的な人間形成原理(共同体)は崩壊し、学校が村内の文化的ヘゲモニーを掌握する。また、解体した村の共同性に代わって、都市の新中間層の家族をモデルとした「望ましい家族像」が広がり、家族がしつけの担い手になっていく。こうして「教育する家族」が一般化する。1970年代になると、「教育する家族」は自立化し、「学校を使いこなす」親たちが現れる。力関係は逆転し(学校>家族→学校<家族)、「教育する家族」は学校に多様な教育要求を突きつけるようになる。他方で、家庭としての機能を円滑に果たせず、世間から批判を浴びる家庭も存在し、家族自体も多様化していく。

以上から筆者が理解したのは、今日では、多様な家族と、その家族からの多様なニーズに応えるサービス機関と化した学校、この二つが存在するのみで、かつての村のような、生活に密着した、人と人とのつながりから生まれる共同性が失われてしまった。家族も学校もこの欠落を補完できていない、ということである。

(c) 教育学の地域への関心

この節の課題は、今なぜ教育で地域が問題となっているか、という問題に答えることである。報告は教育学の関心が地域社会の問題を教育に包摂する方向に推移してきたという。その最初の現われが1940年代後半から50年代初頭で、第2期が60年代後半から70年代である。この時期に「地域の教育力」という概念が登場し、地域社会の崩壊を教育の問題として捉えるようになる。80年代には、教育学の関心はいじめなどの学校内部に移るが、96年以降、中教審の答申に「家庭・地域と学校の連携」が示される。学校万能主義幻想が崩壊し、学校機能の脆弱性・限界性を地域によって補うために、「地域総がかりの教育再生」が叫ばれるようになった。この間に「連携論」の性格も変わっていった。高度経済成長期までの「連携論」は学校優位の構図であったが、今や学校を改革するための議論になっている。「『何もかも引き受けてこなす学校』という像が行き詰ったこと、家庭の自立性が高まって学校が提供する教育サービスの質への関心が高まったことが、『開かれた学校』というスローガンを必要とする状況を生み出している」(広田照幸氏の研究)。また、「地域の教育力」の捉え方が深められ、「地域社会の地縁的・規範的価値への依存」から「住民参加による合意形成と地域づくり」に、さらには、「子ども自身が主体的に参加し、大人とともに育ちあう共同の関係づくりの模索」に向かっているという(佐藤一子氏の研究)。

以上の展開は、(b)日本における家族・学校・「地域」の関係史とあわせて考えれば、よく理解できる。明らかなことは、村の伝統的な人間形成原理が解体し、共同性が失われてしまった以上、問題解決のためには、共同性を意図的に作り出さなければならない、地域社会(コミュニティといった方がいいかもしれない)を創造しなければならない、ということであろう。

(d) 地域社会の人間形成的側面

ここは地域教育の意味・意義を説いた最も重要な節である。結論は、コミュニティ形成との関係において教育の役割がきわめて重要だということである。ここでは言葉の整理が欠かせない。報告には、「地域社会」、「コミュニティ」、「地域社会の教育力」、「地域の教育力」と、類似の言葉が出てくるからである。それぞれの定義については註¹⁹をご覧くださいといたして、報告の要点の

み記せば以下のようなになる。

これまでの説明で明らかのように、今日の問題を生み出す重大な原因のひとつは地域性と共同性の欠如である。したがって、新たな共同性をもつ、新たな地域社会を、別の言葉でいえば、コミュニティを、創造しなければならない。教育の役割はまさにここにある。つまり、地域住民の意識と行動を望ましいコミュニティづくりに向かわせる役割を担うのが教育だ、というのである。この教育が何を指しているのか明確ではないが、「地域社会の教育力」ではないかと思われる。そして、これが機能するためには、家族・学校・地域社会の教育的協業体制が必要なのである。

(6) 吉村伸夫教授（司会）の総括

最終回の「全体のまとめと質疑応答」では、地域文化学科の吉村伸夫教授に司会をしていただいた。ここでの質疑応答については紙数の関係で省略させていただくが、冒頭で行われた吉村教授の総括が示唆に富んでいるので、ここに記しておきたい。なお、質疑応答は下記の3について報告者と野田教授が回答する形を取った。

1. 多くの問いの根底に見えるものについて

すべての問いあるいは疑問²⁰を何度も読み返してみると、結局のところそれらは、「地域とはなにか、そして地域学とは何か」、という問題に収斂するように思われる。学生はこの問題を抱え・あるいは背負わされている当事者でもあるのだから、この問いはそのまま、彼らが自分の中に抱えた不安でもある。この不安は、「地域学部の学生である自分というアイデンティティに組み込まれた不安」であって、アイデンティティ理論から考えると、一部の学生にあってはアイデンティティ確立のための猛烈な努力を生むだろうが、多くの学生にあってはむしろ、不安から目をそむける反応を生み、結果的にシラケや学習意欲の減退を生みかねないと思われる。

そこで、今一度全ての問いを見直すと、たとえば、地域学の必然性や有効性、また地域という考え方に立つ必然性についての問いは、あきらかにいま提示した根元的な問いから生じている。また、自分が考えたり感じたりしている地域と、この講義で説かれる地域とのズレについての問いかけも同様であるし、人と人のつながりが稀薄になっていると言われる現代において、地域とは何であるのか、あるいはそれは有効なのか、という問いも、一歩深く踏み込んだかたちで、やはり同じ問題に帰着する。なぜこういう科目体系なのかという問いの背後にも、なぜこういう学科配置なのかという問いの背後にも、同じ問いがあるだろう。

さて、学生側にあるこの問いを教員側から捉え直せば、とりもなおさず、教える側である自分たちの一人一人が、「地域とは何か、地域学とは何か」をどう語るのか、ということになる。じっさい、はっきりそう問いかけている学生も少なくないし、先ほど指摘したアイデンティティの問題を視野に入れて考えると、この問いはほとんどの学生の心中にあることが実感される。もちろん、地域とは何か、地域学とは何かについての答えは、誰にとっても永遠に暫定的たらざるをえないが、

¹⁹ 「地域社会」：ある程度の社会的結合によって特徴づけられた社会生活の行われる地域。地域性と共同性をもつ。また、居住を契機に展開される社会的相互関係や相互作用をもつ。「コミュニティ」：実態としての地域社会ではなく、実現すべき理想的状態や価値を含む地域社会概念（筆者の整理）。「地域の教育力」：地域社会での生活のもつ形成力。地域社会の教育力から家族と学校の教育力を除いたもの。「地域社会の教育力」：地域の教育力と家族の教育力と学校の教育力からなる。

²⁰ [資料3]「2007年度地域学総説に関する学生の質問」を参照。

ここで求められているのは、もちろんその次元の話ではない。とにかく現時点で、真っ正面から答える試みが、教員には求められていると思われる。

2. 別の角度から見ることもできる。

しかしながら、表明された問いを通観すると、学生あるいは教員の一人ひとりが「地域」という言葉から直観（直感）するものについては、いま整理してみたように、「その内容が何か」という問題があるのは確かだが、それとは別に、その問題がどの程度の鮮明さあるいは濃密さをもって各人の心にあるのかという問題があることもまた、見えてくる。学生の心には、たとえばこの講義などで地域という概念をめぐるいろんなことを聞かされるので、仮に出発点ではゼロであっても、この言葉につながる事柄は少なくともそれなりに言葉としては蓄積されてくる。だが、じつは本人には、その言葉の内容となるべき体験も思索も存在しないか稀薄であることが多いのではないかと。言い換えれば、各自の心の中で表現され言葉にされることを待っていた体験や思索が存在しないか稀薄かであることが、多いのではないかと。もちろん、講義や講演を聴いて、分からなかったことが分かった、あるいは、認識を改めたという感想もあるので、ここで語られた知的枠組みでようやく整理や位置づけができたような実体験や思索体験を抱えこんでいた学生諸君もあるのだろう。そうした学生には、この講義シリーズは天の恵みだったに違いない。だがそうした例は多くないらしい、というのが率直な感想である。

となると、言葉は厳しいが、多くの問いや疑問について、先に指摘したような、教員側に答える責任があるはずの根元的問題はあつたものの、その一方で学生諸君に対しては、その程度の問いや疑問しか抱き得ない未熟な自分を省みて謙虚になりなさい、と言うべきではないのか。司会者としては僭越だが、そう言いたく思う。というのも、講義が自分にとって面白くないことで正当化できると思うのか、講義の最初から突っ伏して眠っている学生までが、アンケートにはまともそうなことを書いて提出する。そういった学生は、18才や19才で、すでにそこまでおざなりかつ偽善的に生きることを、選択しているのであり、そのことを教育者としての我々は看過することはできないからである。1ではこの場で教員に求められること、そして2では学生に求められることを、司会者という立場では僭越かも知れないが、この講義シリーズすべてに出席した者として、まとめてみた。

3. さて、以上のことを踏まえて、それぞれの先生は、ここに印刷されている問いからどれか一つ（あるいは同種の問いかけを煮詰めて一つの問いにしても良いが）をとりあげ、それに即して答える形で、真正面から自分にとっての「地域」と「地域学」を短く語ってもらえないだろうか？じつはこの要求は今朝ほど伝えたものなので、あまりに唐突といえば唐突であり、したがって戸惑っておられるだろうが、その戸惑い自体を、言葉にすることも答え方のひとつであろうと思われる。というのは言葉はロゴスであつて、混乱や混沌が言葉になったなら、その混沌あるいは混乱は、ある意味ではすでに混沌あるいは混沌ではなくなつており、論理的対処に踏み出す準備ができたことになるのだから。

3. まとめと自己評価

以上が今年度の地域学総説の主な内容である。地域学の理論的全体像を現段階においてできるかぎり鮮明にすることが、この授業の課題の一つであるが、今年度は何をどこまで積み上げることが

できただろうか。さらに、どんな課題が明らかになったであろうか。

地域学というとき、確かに様々なタイプがある。2年間の「総説」で提示されたものをみてもそれはいえる。「これこそ地域学だ」と地域学を確定することに努力を傾注するよりも、多様性をそのまま受容し、それぞれの地域学の特徴や役割を確認して、自分がどのような視点に立って地域に臨むのかをきちんと自覚した方が生産的なものかもしれない。これは藤井報告を聴いて思ったことである。藤井報告は、地域学の大枠を示した上で、自分の立ち位置を自覚して地域にコミットするよう勧めている。学生は地域学の巨大さに圧倒されながらも安心したのではないだろうか。

また、地域学の底の深さを知ることもできた。たとえば、家中報告である。民間学の紹介を通して報告が伝えようとした「自分の生活を自分の問題の母体としてとらえ、問題を探りあて、それと取りくむことを学問としてとらえる」姿勢、自分の問題とつながった学問の必要性には、おおいに共感した。忘れていたことを思い出させてもらったといった方がいいかもしれない。「なぜ地域なのか、地域学なのか」という問題は、昨年度の吉村報告、光多報告、野田報告でも取り上げられた。視点はみな違ったが、それぞれに説得力があった。家中報告は別な角度から深く掘り下げることに成功している。地域学は多様であるが、もっと徹底的に議論することで、共通の基盤を構築できるかもしれない。今年度の「地域学入門」では、光多教授と吉村教授が最初の2回で「地域を見る視点」、「地域で生きる」と題して報告をされた。二つの報告は地域と地域学について身近なところから説き起こして、学生に強烈なインパクトを与え、地域学を学びたいという意欲をおおいに高めた。お二人に家中准教授や野田教授をまじえて報告と討論を行えば、地域学の目的と存在意義がはっきり見えてくるのではないだろうか。来年度は、この問題をめぐって教員の白熱したディスカッションを期待したい。

一盛報告は学校とは異なる知のありかたに注目した点で家中報告に通じるところがあった。また、「形成」と表現されていたが、ひとが無意識的に身につけていくものとそのプロセスを重視する点では、地域のノームと文化的個性を強調した吉村報告（昨年度基調報告）と重なる。一盛報告が地域社会の生活がもつ形成力をコミュニティ創造の重要な要素とみているだけに、この問題について家中氏、吉村氏、一盛氏の三者でディスカッションを行えば、さらなる掘り下げができるだろう。

松本報告は、健康という一つの指標を通してみえてくるものの大きさを示した。門外漢には「地域と環境」というテーマはあまりに大きく、どこから手をつけていいかわからなかったが、対象を鋭く絞ることで地域性に迫ることができることがわかった。また、様々な情報から意味を読み取ってひとつの解釈を導き出すことの難しさも伝わってきた。今後は、総論的議論から一歩進めて、地域性を把握するための方法論に関する議論があってもいいのではないか。筆者自身は、何らかの指標に基づく分析から浮かび上がってくる空間的特性と「地域」との関係に大いに関心をもった。他の報告者の意見をうかがいたいところである。

この2年間、教員によるディスカッションを企画しながら、単なる質疑応答で終わってしまっている。というのも、議論が空中戦と化して、学生が置き去りにされてしまうことを恐れたからであるが、討論するに値する論点も見つかったのであるから、そろそろ本格的なディスカッションをしてもいいのではないだろうか。学生に理解できないところが多々あるかもしれないが、教員が見解をぶつけ合うなかではじめて見えてくるものもあるだろう。研究の面白さ、難しさ、そして謙虚さが必要であることも伝わるかもしれない。

次に、「総説」の問題点・課題について考えてみたい。昨年度も今年度も「総説」は「地域とは何か」、「地域学とは何か」を中心に組み立てられた。地域学であるから、それは当然のことである

が、「地域」を意識するあまり思考が縮こまりがちになってはいないだろうか。「地域」という言葉は、それを耳にするものにどこかしら「閉ざされた」印象を与えていないだろうか。実際には、「地域」は単独では存在しえないし、それどころか、グローバリゼーションが進行するなかで、さまざまなものが地域や国家の境界を越えて入っているのだが。

実はこの問題について、「地域学入門」で興味深い報告があった。仲野誠准教授の「ローカルのグローバルな基礎とグローバルのローカルな基礎－わたしの幸福とわたしたちの幸福－」と題した報告である。この報告は、「ローカルなものごとグローバルなものが解きほぐすことができないほど絡み合うようになっている」という社会学者アンソニー・ギデンズの言葉から始まって、概ね次のようにいう。「越境するヒト」・「越境するモノ」・「越境する食糧」がある人々に豊かさを与え幸福にする一方で、他の人々から多くの豊かさを奪い不幸をもたらしている。ここには「圧倒的な非対称性」と、個人の意思とは無関係に存在する「関係の絶対性」とがある。しかも、この構造は構造であるがゆえに目に見えない。そして、最後にこう指摘する。「自分のローカルにのみ着目することは、それを支えている構造を見えなくする。ローカルを取り巻くものを見るようにする必要がある」と。これは今の「総説」にとって貴重なアドバイスではないか。来年度の「総説」では、「地域」を構造の観点から考察する報告がほしい。また、藤井報告のいう「関係性」や「重層性」とどういった関係にあるのか。これもまた掘り下げたい点である。

次に学生の質問からひとつ。ある学生が「地域にリアリティを感じられない」とアンケートに書いていた²¹。筆者はひどく共感した。というのも、「総説」の実施責任者を務めてはいるが、「地域」という言葉になんとなく違和感があるからだ。質疑応答の際には、「『地域』はそもそも目に見えないのではないかと。むしろ、人はどういつながりをもって生きているのか。どのようなつながりを創ることを目指すのか、そういところから考えたほうがいいのではないかと」答えたが、やはり気になった。また、別の学生は授業の感想に「私の両親はコミュニティなんていないといっています」と書いていた。「地域」への強烈な反発である。これも気になった。なぜだろうか。

われわれは授業で「地域」についてどのように語ってきただろうか。常に肯定的に語ったのではなかったか。われわれのいう「地域」とは何らかの価値をもった空間、これから力を合わせて創っていくものである。たとえば、一盛報告のいうコミュニティがそうである。しかしそれは「現実の地域」と無縁であるはずがない。この地域はそこに生きるものにとって常に好ましいものだろうか。この地域は「ひとを支えるもの」と同時に「制約するもの」でもあるのではないかと。地域には「きずな」と「しがらみ」の両面があるのではないかと²²。つながりがあるからこそ、救われるのだが、苦しみもするのだ。リアリティを感じるには、この「制約」の部分、「しがらみ」の部分にも目を向ける必要があると筆者には思われる。

これと関連して想起されるのは、フェルナン・ブローデルの以下の文章である（下線は筆者による）。「私が出発したのは日常性であった。生活の中でわれわれはそれに操られているのに、われわれはそれを知ることすらしないもの。習慣 (l'habitude) 一慣習的行動 (la routine) と言うほうが

²¹ 質問は以下の通り。「いろいろ『地域学』についてのお話を聴きましたが、自分のリアリティとして『地域』を感じる事がなければ『地域』について考えられません。最近はそのような『地域』をリアリティとして感じられないのが現状としてあると思います。しかし、『地域』を考えていくことは必要です。どうしたらもっと自分の問題として『地域』を意識できるようにみんながなるのでしょうか？」

²² 二宮宏之「参照系としてのからだところ 歴史人類学試論」、二宮宏之『歴史学再考 生活世界から権力秩序へ』、日本エディタースクール出版部、1994年、3～41頁

いいかもしれない一、そこに現れる何千という行為は、それら自身で完遂され、それらについて誰も決定せねばならないということはなく、本当のところ、それらはわれわれのはっきりとした意識の外で起こっている。人間は腰の上まで日常性の中に浸かっているのだと私は思う。今日に至るまで受け継がれ、雑然と蓄積され、無限に繰り返されてきた無数の行為、そういうものがわれわれが生活を営むのを助け、われわれを閉じ込め、生きている間じゅう、われわれのために決定を下しているのだ。こうした行為を行なわしめる刺激、衝動、規範、様式、あるいは義務は、われわれが思っている以上に多くの場合、人類史の起源にまで遡るのである。非常に古く、しかもなお生き生きとした何世紀をも経た過去が、アマゾン川が大量の濁水を大西洋に流し込んでゆくように、現在という時間の中に流れ込んでいるのである。²³ 「腰の上まで日常性の中に浸かっている」というのは、発想と行動を制約されているということだ。しかもそれに気がつかない。同時に、上半身は水（日常性）の上に出ているのだから、この点において発想と行動に自由があるということだ。ブローデルは、歴史学はこれまで腰から上ばかりをみてきたが、腰から下にも目を向けるべきだ、といっているのだが、同じことが「地域」にもいえるのではないだろうか。「地域」という言葉を耳にして、なにかしら息苦しきを感じるが、「地域」がなくていいかという、それも困る。こういう感覚を素直に認める。そういうところから発想できないだろうか。

ブローデルを引用したついでにいえば、「総説」には歴史的な感覚と視点が十分ではない。実践的であろうとする「地域学」が現在と未来に目を向けようとするのはよくわかる。しかし、現在も未来も過去と無縁ではありえない。吉村教授のいうノームは、ブローデルの日常性と同様に、歴史的感覚なくしては理解できない。筆者は、長期的な時間の中で「地域」を捉える、そういう感覚がほしいと思う。

最後にもう一点。吉村教授の指摘について考えてみたい。指摘とは、確かに地域学部の教員には「地域とは何か、地域学とは何か」、真正面から語るべき義務がある。しかし、学生自身にも問題があるのではないか。つまり、報告を聴いて理解しようとする姿勢、理解できるだけの経験と知的な備えがないか、あるいは不十分ではないか、ということである。この指摘には考慮するだけの価値があると思われる。「総説」は地域学の理論的全体像を提示することを目的としている。したがって、その内容は理論的、抽象的にならざるをえない。しかし、吉村教授の指摘によれば、現状では受講生が理解するのはなかなか難しい。学生には、実践を通して経験を積むことと同時に、新聞・雑誌・書物などによって社会とのつながりを確保することが望まれる。教員には、具体例を通して抽象的な理論を伝える、そういう工夫が必要であろう。情報の提示の仕方、伝え方にも、ひと工夫が必要である。これは「地域学入門」も含めての話であるが、筆者は本稿を書くために教室にノートパソコンを持ち込んで、学生時代に戻ったつもりでノートを取った。そのとき経験したのは次のことだった。確かにどの報告も知的刺激に満ちていてとても勉強になった。しかし、しばしばパワーポイントで提供される情報は膨大すぎたし、話すスピードが速すぎて、ノートを取ることもままならなかった。話も抽象的すぎて、頭の中で論理が繋がらないことも、率直に言って、あった。聴き慣れているはずの筆者でさえそうだから、学生は理解するのに苦労しているのではないか、ノートが取れなくて困っているのではないか、心配した。学生に知的な備えがあれば、それほど危惧しなくてもいいのかもしれない。しかし、それでも、報告が聴く者の心に届くためには、考える時間とある程度の具体性が必要ではないかと思う。抽象と具体、そして考えるためのゆとり、これら

²³ フェルナン・ブローデル『歴史入門』、太田出版、1995年、18-19頁

をもっとうまく組み合わせることが教員には求められているのだろう。

おわりに

授業を終えて、「地域学入門」は成功したという自信があったが、「地域学総説」の場合は不安が残った。学生たちにとって意味ある授業になっただろうか。それとも、聴講するのが辛いだけの授業だっただろうか。そんなことが頭をよぎった。それを知る手がかりのひとつは「学生による授業評価」だが、残念ながらその分析結果はまだ筆者の手に届いていない。昨年度の授業との比較ができるので、その意味では有効だが、5段階で示されるだけの「授業評価」の統計数値よりも参考になるのは、学生自身が書いたレポートであろう。授業では学生に2回のレポートを課したが、とくに重要なのは、ストレートに地域学についての理解を書くよう求めた2回目のレポートである²⁴。本稿を終えるにあたって、2回目のレポートを手がかりに、学生たちが授業をどのように理解したのか、どう受け止めたのか、学科単位で考えてみたい。なぜ学科単位なのかというと、理由は2つある。ひとつは、4学科の学生は2年間それぞれの学科で教育を受けて、「学科文化」(吉村教授)ともいべきものを身につけていると経験的に感じるからである。「総説」で同じ内容の報告を聴いても誰もが同じように理解し受容するわけではない。このことは学科単位でもいえるであろう。筆者は、学生たちがどのような「学科文化」をもっているのか、またその枠を越えることができたのか、知りたい。もうひとつの理由は、それがわかれば来年度の「総説」に生かすことができるし、それぞれの学科でも「地域学」を意識しつつ個別の授業をする際に役立つと思われるからである。ただ、予めお断わりしておきたいのは、これから述べることは筆者の印象論的な理解だということである。もう少し分析的方法で解釈を導き出すことも可能であろうが、時間の関係で今回はできなかった。的外れの場合は、どうかご容赦願いたい。

最初に地域教育学科を取り上げる。というのは、昨年度の「学生による授業評価」でもっとも満足度が低かったのがこの学科だったからである²⁵。拒絶反応にもみえた。彼らにとって、教育とは、全国のどこでも同じ性格のもの、あるいは普遍性をもつもの、と認識されていたのではないか。そこに「地域」という概念が入ってきて混乱してあのような反応になってしまったのではないか。このような認識があったので、今年度はできるだけ配慮したつもりである。同じような懸念は第1部で学生ディスカッションの司会を務められた田中玄洋氏も感じられたのか、テーマに「廃校利用」を選ばれた。われわれがお願いしたわけではなく、田中氏自身の判断によるものである。

さて結果はどうだったのか。地域教育学科のレポートの採点を担当した一盛准教授の感想によれば、「学生たちの関心は未だ限定された『学校空間』にあり、地域と教育が切り離せない関係性にあるという理解は弱い。」ただし、拒絶反応というわけではない。

確かに、筆者もレポートを読んでよく似た印象をもった。記述内容がおおまかで、レポートを書かなければならないからなんとか綺麗にまとめた、そう思わざるをえないものが少なからずあった。「わからない」、「面白くない」のなら、それを認めて、そこから知的に格闘して批判すれば

²⁴ その課題は、「授業についてもっとも興味深かった点とその理由を述べなさい。次に、あなたにとって地域学とは何か述べなさい。もし授業を聴いて地域学の認識が変わった場合は、どういう部分で変わったのか、それも含めて述べなさい」である。

²⁵ 以下が昨年度の評価である。最初の数値が「授業内容の進め方」の平均値、2つめが「満足度」の平均値で、いずれも3が「普通」である。地域政策：3.59と3.25、地域環境：3.53と3.09、地域文化：3.36と2.55、地域教育：3.04と2.21

いいのではないか。実際、一貫して「総説」に否定的・批判的でありながらも、最も重要な点をしっかりと捉えたレポートもあった。もうひとつ気になったのは、なにもかも教育という枠のなかで考えようとする癖である。教育重視の気持ちは当然だとしても、はるかに大きくて複雑なものを教育というある意味で限定された枠組みのなかで考えようとするのは、そもそも無理なのではないか。とはいえ、このような傾向ばかりではない。地域教育学科以外の考え方を知る喜びも伝わってきた。学生たちがもっとも反応したのは、田中氏の学生人材バンクと氏が司会された学生によるディスカッションである（51名中17名）。その理由は、自分たちと同じ学生が地域に積極的に取り組んでいることがわかったこと、他学科の学生たちの考え方を知ることができたこと、である。学生によるディスカッションについても同様である。他学科の授業内容をもっと知りたい、地域について考える機会がもっと早くからあればよかった、という感想もあった。また、教育を地域のなかにおいて捉え直そうとした学生も少数ではあるがいた。彼らにとって「総説」が「地域」や「地域と教育」について考えるきっかけになったことだけは確かだろう。昨年度にはあまり見られなかった収穫である。

なお、地域と教育との関係については、「最も興味があった点」として取り上げた学生がどの学科でも意外と多かった。もちろん、報告内容が優れていて彼らの関心に近かったからであろうが、それだけでなく、「教育が地域と関係あるわけがない」という思いが、地域教育学科以外の学生にもあったからだと思われる。それだけに学生たちは一盛報告を聴いて意外だったのではないか。この問題については、地域学部としても状況をきちんと把握し対処する必要があるだろう。

次に、地域文化学科はどうだろうか。レポートの採点担当者である野田教授は次のように感想を述べている。「初等、中等教育段階で『地域』という考え方をほとんど学んでこなかったため、大学で『地域』といわれることにとまどっている感じがする。『なぜ地域？』、『地域って何？』という根本命題のところで突っかかっている学生が多いように思う。これは現在の政治システムや教育の現状からいってある程度仕方ない面もある。しかし、地方分権など地域が主体となるトレンドは今後とも進むと思われるため、『地域』は重要なキーワードであることに気づき、関心をもつように学生を動機づけることが最も大事である。そのためには事例分析と抽象的理論の間を行ったり来たりしながら進める必要がある。レポートの課題も、事例を与えてそれにコメントさせるような方法も必要かも知れない。」

この指摘は4学科全体に当てはまるかもしれないが、地域文化学科の学生たちにとまどいがあったのは確かである。ただ、筆者の印象では、それだけではなかった。レポートからは、学生たちの多くが、地域について考えよう、授業から何かを吸収しようという姿勢をもっていたことがわかる。また、地域を自分の日常生活を通して捉えようとしてもいる。おそらく、地域（学）の重要性（あるいは地域をみる心構えといった方が正確かもしれない）を認識し、おぼろげながらも自分なりの地域学観をえることができたのではないだろうか。文化でなければ関心がないという印象はまったく受けなかった。逆に、普段、文化に関する講義ばかりを受けているので、「総説」で他学科の教員の報告を聴いて地域学の多様性と多様な視点に触れることができてよかった、と素直に喜んでる²⁶。「新鮮だった」、「多様な見解のぶつかりあいから、これまでにない、新しい何かが生まれる」

²⁶ 実をいえば、今回、地域文化学科の教員の誰一人として文化の立場からの報告をしていない。確かに筆者（地域文化学科の教員）が報告したが、昨年度の授業の成果を紹介したにすぎないし、野田教授の報告は番外編で、聴講したのは受講生の半数でしかない。

という感覚は貴重である。

地域環境学科については、かなりの学生が授業内容をうまく消化できないでいるか、わがものにするために格闘している。地域環境に閉じこもっているわけではない。漠然とではあれ、報告のエッセンスを感じ取っているようだ。また、報告をしっかりと受け止め、懸命に整理して、自分の見方をもつに至った学生や見事な批判を展開した学生もいる。筆者自身、本稿を執筆するにあたって思い悩む点が少なくないので、彼らの文章に敏感に反応するのだが、「ああそういうことか」と教えられることも少なくなかった。彼らに共通しているのは、徹底的に考えようとしていることだ(そう書いた学生もいる)。「地域学」が生まれたばかりの、これから成長していく学問であるから、教員として現時点でまとまった全体像を示すことができないのを申し訳なく思うが、そういう不十分な状況のなかで徹底的に考えようとする学生がいることは、彼らの潜在的な可能性の大きさを感じさせてくれる。

最後に、地域政策学科の学生はどうだろうか。この学科の学生は地域学に最も親しみやすいように思われる(昨年度の「評価」でも最も数値が高かった)が、実際、授業内容をよく消化して、自分の言葉で自分なりの「地域学」を語ることのできる学生が多かった。なかには「地域学」の現状を正確に把握して、足りないところを鋭く指摘した学生もいる。多くの学生が広く関心をもち、決して地域政策の枠内にとどまっていない。むしろ、「総説」で学科の外に出ることができて楽しんでいるように見える。最も興味深かった点として「地域と教育」や「地域と環境」の報告を取り上げた学生が半数近くもいるし、他学科の教員の報告を聴くことができたと素直に喜んでいる学生も多かった。この学科の学生に特徴的なのは、地域との距離があまりないことだろう。どうやら地域調査実習(2年生)で地域に入り込んで眼を開かれたようである。地域政策学科の教員の話では、学生が社会との接点をできるだけもつことができるようにしているとのことである。

全体として、学生たちは授業を通じて現時点での「地域学」のエッセンスを認識できたか、少なくとも感じとったように思われる。あるいは、地域をみて考えるポイントのいくつはつかんだのではないだろうか。

今年度は2年目ということもあって、昨年度ほどの苦労はなかったが、振り返って思うのは、なんといっても教員間の議論が十分ではなかったということである。第3章「まとめと自己評価」で述べたようなことは、報告者であればどなたも感じられたことと思う。もちろん、筆者とは異なる問題点に気づかれた方もあるだろう。最も望ましいのは、事前の勉強会で一度報告し、論点を整理して、内容面でもっと連携を深めながら、授業で報告することである。もちろん、企画会議で議論しつつ授業プランを作り、授業開始後も話し合いの場をもって工夫につとめるという現在の進め方はかつてないことで、教員の負担も決して軽くはない。しかも、メンバーの多くはフィールドワーク等で多忙である。こういう事情を考えると、できる限りの努力をしてきたのは確かであるが、それでも十分とはいえない。できることなら「地域学を創る」という観点から定期的に研究会を開きたい。学生相手ではない、教員だけの、研究者としての徹底した討論をする機会がほしい。研究会には、「総説」、「入門」のいずれにも関わることのない教員にも、できるだけ参加していただきたい。地域学部の教員が総力を挙げて取り組んでもなおその歩みは微々たるものであろう。われわれが掲げている「地域学」という看板は、とてつもなく大きく重いのである。われわれの責任も同様である。2年間、「地域学総説」の実施責任者を務めてみて、わかったことである。

参考文献

- 新崎盛暉・比嘉政夫・家中茂編『地域の自立 シマの力（上・下）』，コモンズ，2005年，2006年
 現代農業2001年5月号増刊『地域から変わる日本－地元学とは何か』，農山漁村文化協会
 高谷好一，『地域研究から自分学へ』，京都大学学術出版会，2006年
 鶴見俊輔，『読んだ本はどこへ行ったか』，潮出版社
 富永健一，『現代の社会学者』，講談社，1993年
 下河辺淳『戦後国土計画への証言』，日本経済評論社，1994年
 「産育と教育の社会史」編集委員会編『叢書 産育と教育の社会史』1～3巻，新評論，1983～1984年
 小野雅章他編『教育の文化史』2・4巻，阿吽社，2005年
 広田照幸『日本人のしつけは衰退したか』，講談社新書，1999年
 矢野峻『地域教育社会学序説』，東洋館出版社，1981年
 久富善之「地域と教育」，『教育社会学研究』50集，1992年
 二宮宏之「参照系としてのからだところ 歴史人類学試論」，二宮宏之『歴史学再考 生活世界から権力秩序へ』，日本エディタースクール出版部，1994年
 フェルナン・ブローデル『歴史入門』，太田出版，1995年
 チャールズ・ランドリー『創造的都市：都市再生のための道具箱』，日本評論社，2003年（絶版）
 佐々木雅幸・合研究開発機構編『創造都市への展望』（学芸出版社，2007年）
 リチャード・フロリダ『創造階級の台頭（仮題）』（ダイヤモンド社，2007年秋発売予定）

参考資料

〔資料1〕授業日程

1. 授業計画の紹介
 地域の課題（1）：「鳥取県の地域の形－鳥取県の経済構造－」（千葉雄二氏 とっとり総研調査研究ディレクター）
 2. 地域の課題（2）：「地域づくりの諸課題について」（藤田安一教授）
 3. 学生の地域活動報告（1） 「TOMOCO－鳥取まちなか往来復活コラボ（都市再生モデル調査事業）」（地域学部生）
 4. 学生の地域活動報告（2）
 ①「倉吉打吹地区での手作りライブコンサートDOZO de Live at HOME vol.1」（医学部学生 本田聡子氏）
 ②「学生人材バンクについて」（学生人材バンク代表 田中玄洋氏）
 5. 学生によるディスカッション（司会：田中玄洋氏）
- 【番外編（教育実習期間）】
- ①「地域資源を活用した地域の創造的再生（創造都市論）」（野田邦弘教授）
 - ② 地域活性化に関するビデオをみる
6. 「2006年度『地域学総説』の到達点」（柳原邦光准教授）
 7. 「なぜ地域学か－『地域』という分析枠組」（家中 茂准教授）

8. 「地域と地域学－地域の関係性と重層性－」(藤井 正教授)
9. 「地域と健康－とくに発育促進現象をめぐって－」(松本健治教授)
10. 「地域と教育」(一盛 真准教授)
11. 「諸報告の要約・整理」(柳原・家中・藤井・松本)
12. 「全体のまとめ」と質疑応答(司会 吉村伸夫教授)

〔資料2〕連続講演「地域を創る」

地域学部地域学研究会主催

- 第1回 4月11日 千葉雄二氏(とっとり総研調査研究ディレクター)
「鳥取県の地域の形－鳥取県の経済構造－」
 - 第2回 5月28日 吉田幹男氏(地域デザイン研究所所長) 「鳥取の地域性」
 - 第3回 6月4日 岡田 実氏(「NPOいんしゅう鹿野まちづくり協議会」理事)
「地域コミュニティと住民参加, NPO」(家中茂准教授との対談形式)
 - 第4回 6月11日 酒本和昌氏(智頭町役場) 「智頭町の挑戦」
 - 第5回 6月18日 杉本由香里氏(南部町教育委員会指導主事)
「地域と教育」(渡部教授との合同講演)
 - 第6回 6月25日 藤山 浩氏(鳥根県中山間地域研究センター地域研究グループ科長)
「生命地域としての再生を目指す中山間地域」
 - 第7回 7月9日 園山土筆(八雲国際演劇祭・芸術監督 NPO法人あしぶえ・理事長)
「『八雲国際演劇祭』で人づくり・まちづくり」
 - 第8回 7月16日 木谷清人氏(鳥取民芸美術館常務理事)
- * 「吉田璋也鳥取新作民藝運動 その2 1898～1931-1972」

〔資料3〕2007年度地域学総説に関する学生の質問

1. 教員の地域観

【教員間に共通する地域学観があるのだろうか】

Q1: 地域学を捉えるために様々な視点から地域学を見てきたわけですが、やはりどこか地域学総説としてのまとまりを感じる事が出来ませんでした。先生間での地域学観というものはどの程度統一されているのですか?

A: 地域学の定義と自分の問題としての地域:

藤井が紹介した光多先生の定義(地域学の四側面)が、昨年の総説での教員間の議論もふまえ、入門でも担当教員にも受け入れられ学生にも好評で、広い分野や実践を把握できるでしょう。この地域学のプロセスのどこかに、研究教育においてそれぞれの方法論でたずさわりたいと、地域学部の教員は考えていると思います。繰り返しますが、それでもこのすべては一人ではできないので、皆さんはそのプロセスの中で今回紹介する成功例も参考に、自分たちの位置取り、すなわち「私の地域学」を、自分の得手不得手や勉強したこと、勉強したいこと関心に依じて、また仕事や生活での地域との関わりの中で自分なりに考えていってください。(藤井)

【教員間の見解の違いと合意形成】

- Q2：地域学総説の授業を準備するにあたり、各学科の先生方が昨年度から長時間議論を重ねられたと聞きました。最初、学科ごとに先生方の意見の違いなどありましたか？あったとしたら、どんな点で話し合われて合意に達したのか、また、見方の違いで発見されたこと等、教えてください。
- A：家中先生のいう地元学の視点・フレームワーク。住民などの人と一緒に地域の諸要素（地域資源）を学び、（それらへの認識のお互いの違いなどをふくめ）発見する重要性。

【大学祭をどう考えるのか】

- Q3：今日の話の中で、「地域学って何？」って人はだんだんいなくなっていくという内容があったり、この講義自体、地域学を大切にしようという傾向にあるようですが、現状はどうでしょうか。大学を例に挙げると、地域の人と関わる大きなチャンスである大学祭が、年々軽視されています。学生部や学校の各機関の方針は厳しくなるばかりで、今年は前年より規模の小さなものになりそうです。来年はもう大学祭ができないかもしれません。先生方の中には、大学祭を学生が騒ぐものとしてひどく嫌っておられる方もあるようです。大学祭は学校を地域にアピールするチャンスでもあり、学生がただ騒ぐだけのものではないと思いますし、様々な魅力があると思います。先生方は大学祭をどのようにお考えでしょうか。生の声が聞きたいです。
- A：大学祭が学生だけの内輪のお祭りに終始するのではなく、地域に開かれた、地域ぐるみのお祭りになる、という方向はどうでしょう（野田）
- A：大学祭を地域と大学とが関わる機会とするなら、そのような性格付けのコンセンサスと理解を、学内できっちりとしておく必要がある。現在は、そのような側面もあるが、必ずしもそのようなものとは理解されていないと思う。（藤井）

【教員の見る鳥取の地域性】

- Q4：せっかく鳥取という地で地域を勉強しているので、もう少し全教員の鳥取という地域性の捉え方など知りたかった。どうでしょうか？
- A：鳥取の地域性と卒業生含めた人材ネットワーク（多様な分野との連携）：
人口が少ない、成長産業が少ない（裏返せば、自然が多い、その条件下でも地域資源の活用による地域づくりの事例がある）、そんな鳥取から発信できれば、それ自体、従来とは異なる価値観の発信になり、これからの日本の地域を基礎から支える人材の提供になる。この総説での議論も、地域づくりに関する外部講師を呼んでの授業や今後の卒業生を含めたネットワーク（多様な分野との連携）構築も、その一部となる。岐阜大など他の地域学関係の大学とも交流を展開し、10月にもシンポを行う。

2. 地域と地域学

【地域学の定義】

- Q5：地域における学際的アプローチということについて、まず学問分野によって「地域」というものを考える上での定義を問題とするところは違ってくると思います。地域学部における4学科が関わりを持って取り組んだり、交流したりするときなどには、その多面的な視点が重要なものかもしれませんが、それにも共通してもっとおかねばならない知識や定義があると思うのですが、

何かありますか？

A：学問分野で関心領域が異なるため、おそらくないと思います（野田）

【地域学の基礎・前提は何か】

Q6：地域学というものに対しての考え方は、人によって様々で、地域学とは何かという問いに対して明確な答えがないように感じます。地域といっても、スケールが違ったり、問題が違ったりすると思うのですが、全ての前提になるような基礎的なものがあるのでしょうか？

【地域学が必要とされる背景】

Q7：地域学が必要とされる背景の最も大きな要因は何ですか？また、地域の問題を政策・環境・教育・文化にしぼったのはなぜですか？

A：地域が人間が生きていくための基本的な空間的まとまりだからです。校区、自治会、コミュニティ等（野田）

【地域学の目的と存在理由】

Q8：なぜ「地域学」という言葉がぴんと来ないのか？

- ・地域学の理論はわかるが、現実にあてはめるときに、地域といっても個々が多様であるし、くくり方も多様であること、そして何より「地域」が何を目的としているのかがそもそもわからない。たとえば、昔の農村なら、豊かな農業を営むことが目的だっただろう。今は何が目的なのか？豊かに暮らしたい人は都会に出たり、個人でどうにかするのが今の日本の住民の考え方だと思う。
- ・地域学（地域）はどんなことを「目的」としているのか？（多様だと思うけれども）問題解決という意味でなく、もっと根本的な地域の存在理由。

A：例えば地域に受け継がれてきた祭りに参加することが生き甲斐という人もいる。地域はある人たちにとって、生きる拠り所（野田）

A：現代の諸問題の解決には、それぞれの場所に依じて総合性を持った分析考察と、それに対応した新たな地域コミュニティ・ネットワークを構築し、行政任せでない地域づくりが求められているから（ということは、「特区」制度のように、枠組みだけは国の政策でも内容まで国は決められない。またその地域に関して総合的な視野が必要となる）。（藤井）

【地域学の必要性は自明なことか】

Q9：家中先生は「『地域学って何？』っていう人はなくなる」とおっしゃいましたが、それはなぜですか？

A：「地域」ということを抜いて、政策が立てられない時代だからです。このときの「地域」というのは、「地域の人々」ということでもあります。自分たちのことは自分たちでなくてはならないというときに、いちばんの手がかり、基盤となるのは地域だと思います。いつまでも、地域とは何？地域学って何？と言ってばかりいるわけにはいなくなる、ということです。（別の、ちょっと難しい言い方をすると、「地域」に基盤を置く、という立場をとる、ということでもあります。これは説明を要しますから、ゼミや講義では話しますが、今回は省きます）。もちろん、そのうえで、あらためて「地域とは何か」と問うことはできます。それは、何ごとについても、「...とは何か」という根本的な問いが設定するという意味においてです。（家中）

【地域にリアリティを感じない】

Q10：いろいろと「地域学」についてのお話を聴きましたが、自分のリアリティとして「地域」を感じる事がなければ「地域」について考えられません。最近はそのような「地域」をリアリティとして感じられないのが現状としてあると思います。しかし、「地域」を考えていくことは必要です。どうしてもっと自分の問題として「地域」を意識できるようにみんながなるのでしょうか？

A：地域にリアリティを感じないとして、それでは国家にもリアリティを感じませんか。あなたにとってもっともリアリティを感じるのはどんな単位ですか（野田）

【地域の失った機能】

Q11：地域が失った機能は何かを明確にすべきではないか。「なぜ地域が稀薄になったのか」の「なぜ」の部分がはっきりしないと、見当違いになるのでは…。

A：伝統的な地域という枠組みは、国家の枠組みを基礎とする近代化、経済発展優先、効率化の価値観（機能分化・縦割りシステムや専門分化）の中で否定されてきた。しかし、新たな（過去の復元ではない）地域という総合的な枠組みが、現在における科学技術万能思想の限界、環境問題や社会情勢の下で再び求められている。ネットワークですべてコンタクトとれそうな情報コンテンツ産業でも実際には特定地域に集積する。（藤井）

【地域における人と人とのつながりの希薄化】

Q12：携帯電話をはじめとする情報社会の影響で、現実における地域のつながりは、昔に比較して、希薄になっているのではないだろうか？

【人と人とのつながりを欠いた今の地域で、地域観の確立ができるのか】

Q13：最近、近所の付き合いがあまりなかったり、地域の人達のつながりが希薄になってきている状況がよく見られる。特に、都会はそうだと思うが、そのような状態で、どのようにして地域の構成要素を人がつなぐことができるのだろうか。地域の人達のつながりがあまりないのに、地域観はどのようにして確立されるのだろうか。

【地域学の有効性】

Q14：抽象的な理論レベルでの話と現実的な問題をうまく融合させ、どのような解決策が考えられるのかということ具体的に教えてほしいと思う。道具や材料を与えられても、それをどのように使いこせばよいかわからないことがよくある。ある問題を提示され、そこから～といったことが見えてくるというだけでは、不完全燃焼だと思う。具体的に地域学がどのような問題に対してどのような役に立ち、そこからどのような解決の可能性が考えられるのかという具体例をもう少し聴きたい気がする。

A：地域を「こうしたい」とか「どうにかしたい」という思いが希薄なら、おそらく地域学の必要も政策もあまり感じないだろう。だから、地域の課題をきちんと認識してほしいのだが。（野田）

A：地域学の実践は、これから。これまでの成功例などからそのシステムや問題点の一般化や理論構築を、いろいろな分野との議論を重ねて進めている段階。上でも述べたように、この総説での議論も、外部講師を呼んでの授業や他の地域学関係の大学との交流も、今後の卒業生を含めた

ネットワーク構築（多様な分野との連携・協力体制の構築）も、その一部となる。（藤井）

Q15：地域学は多様な分野と結びつけることができ、地域学を通して文化や教育という視点をもてるが、実際の生活にそれは役立っているのか。普段の生活で地域学が垣間見れない。

A：PTA活動、お祭り、冠婚葬祭、様々な地域の活動に役立っていると思う（野田）

Q16：地域学を私たちが学んでどれほどの地域にその成果があるのか？

Q17：結局、就職活動や社会に出てから地域学部で学んだことをどのように活かしていけばよいのか、やっぱりわからない。先生方のおっしゃっていることと、今の日本社会の現実にはズレがあるように思える。

A：現在ではなく今後の日本社会に求められるもののひとつとして、地域学を構築してゆこうとしている。このような方向性を示す人たち（地域学の研究者だけでなく）は、いろいろな分野や世界においてみられる。（藤井）

Q18：こういう地域学という分野は、外国ではどのような形で学んでいるのか。また私たちの考える地域学は世界で通用するのか。地域学を文化・政策・教育・環境の4つにわけたのはなぜか。他にもありそうなので。

A：地域学会は国際的。また地域学という看板は掲げていなくても、地域計画（地域学部では地域政策）には、こうした多様な側面（自然や文化等）の検討が海外でもさらに求められ（たとえばエコ・ミュージアム）、子供（教育）を環境問題の実践やコミュニティ構築にいかに取り込むかもテーマとなっている（たとえば、ハート『子どもの参画—コミュニティづくりと身近な環境ケアへの参画のための理論と実際—』、萌文社、2000）。

3. 地域：その他

【様々な分野との協力】

Q19：これまでの授業のなかで地域について学んできました。しかし、地域のことを学んだときに、それを生かすのは様々な分野との協力が必要になってくると思います。それはどのようになっていくのだろうかと思いました。

【地域・グローバル化・国際交流の関係】

Q20：グローバル化が進行する中で、地域と国際交流は重要だと思います。今、この二つはどういう関係にあるのでしょうか。どのようにするべきでしょうか。（一部改変）

A：地域がいちいち首都東京を通さず、直接海外の国や地域とやりとりし始めました。（野田）

【どうしたら地域に貢献できるのか】

Q21：「地方自治は自分で！！」、「自分が生き生きすることで地域は活性化する」という話があったが、実際に何をすればより地域は活性化するのか。地域学を学んだ私はどのようにして社会に貢献していけばいいのだろうか。

A：地域固有の解決すべき課題を見いだすことが必要です（野田）

【地域学を学ぶには、何から始めたらいいか】

Q22：もっと学科ごとの垣根を低くして学びあうことが大切だということも納得できました。でも具体的に学科ごとに意見を交わしたりする機会がこの講義では少なかったように思います。私ももっと地域学について学びたいという気持ちはあるのですが、問題がばくぜんとしすぎて考えるのが難しいです。何からはじめたらいいですか？

A：地域のことで最も関心があることを深く掘り下げて調べ、そこから徐々に範囲を広げていったらどうでしょうか（野田）

【地域内の付き合い方：面倒くさいという人はどうするの？】

Q23：地方財政論の授業で自治体が住民に「自治体活動のなかでいらなと思うものを挙げてください」というアンケートをとったところ、「電気、ガス、水道、ゴミをちゃんとしてくれればよい…」という結果で、いらなと思う事業のひとつにコミュニティ事業が入っていたそうです。地域の力をつけるということは、やっぱり地域内の人付き合いを親密化しなければいけないのでしょうか？だとすると、そういう参加型の活動を非常に面倒くさがる方々もいるのではないのでしょうか？

【卒業生との連携】

Q24：また、来年から地域学部の卒業生が地域に出て行かれ、これから増えていくと思いますが、そのような人たちと大学で連携していければと思うのですが、どうでしょうか。

A：地域活動と大学が恒常的に交流する場の整備や仕組み作りを行う（野田）

【地域学の学際性と他大学との交流】

Q25：学際という考えなら、学部内だけでなく、他の地域学部のある大学との交流なども必要だと思うのですが、そういう計画はないのでしょうか？

A：いま、全国の5つの大学で交流を開始していますが、これを発展させます。（野田）

【地域への関わり方】

Q26：地域学を学んで、どのような形で地域に関わっていくのか？地域に貢献していけばいいのか？ということがはっきりわかりません。

A：地域で本当に困っていることは何かを調べる。自分がやりたいことを明らかにする。自分がやれることを明らかにする。自分のやり方を明らかにする（野田）

【コミュニティは必要か】

Q27：地域学を学ぶ上で、よく地域コミュニティの重要性が叫ばれるが、果たしてそうだろうか？実際に地域に生きる人はあまりコミュニティを重視しているようには見えない。コミュニティがすべてを解決するようにいうのは現状と逆行し、人々が本当に望むものなのか？

A：古い農村共同体型のコミュニティではなく、個人の自立を前提にした新たなコミュニティは必要ではないか（野田）

【講義理解】

Q28：家中先生の「地域学」を考えるに至る経過がどうつながっていたのか、いまいわかりづらい。

A：日本ボランティア学会2007年度学会誌の特集に、自分の学生時代からのことについて（一部ですが）書いています。6月末には発刊予定だったので、そのコピーを希望者には配布しようと思いましたが、発刊が多少遅れているようです。希望者は言ってくれば用意しておきます。おそらく秋以降になるでしょう。そのほかは、『地域の自立 シマの力（上・下）』の序章を「必ず」読んでください。（家中）

4. 4学科について

【どうして4学科なのか】

Q29：今回の講義を通して、学科間の隔たりを大きく感じた。そもそもなぜ地域学部は政策、文化、教育、環境という学科設定にしたのですか？

A：この4つの要素は、地域をめぐって基礎的な枠組みとなる4つの要素。＜地域の自然＞すなわち地域環境と、＜地域の間活動＞すなわち文化や歴史を分析し地域の特性を探る、それらをもとに今後の地域づくりを考えて＜地域政策＞を展開し、生涯学習も含め＜地域の人材養成＞もはかってくる。地域学部をつくる時の教員の専門分野にも適合していた。（藤井）

Q30：今日の話聴いて、私はますます地域学部として4学科に分かれている理由がわからなくなった。たとえば、何かのプロジェクトが立ち上がったときに、目的に関するプロが集り考えるだろう。だから今地域学部のしていることは「プロ」を中途半端に育てていないだろうかと思ったが、どうだろうか。

A：根っこはひとつの「地域学部生」。その先枝分かれして、4つの花びらとなる。根本は地域学（野田）

A：専門しか知らないプロだけでは、地域の総合的な分析や展望を得られない。広い視野（ネットワーク）を持ったコーディネーターも必要。何度も書いたが、あわせて自分の方法論を持つことが望ましい。

【学科・分野のつながりが見えない】

Q31：4学科の教授がそれぞれの学科の特色をもとに、地域学という学問について述べているが、やはりつながっているようで（もちろん本当に底に降りればそうかもしれないが）、表面的に分野の違いすぎて、自分たちが行くべきことが見えていない気がする。それぞれの分野で策を練るのならば、総合的にこの授業を行う意味がわからないのだが。教授たちはどう考えておられるのですか？

【学科の壁】

Q32：現在の地域学部では、4つの学科がそれぞれの持ち味を生かして、その分野から地域を見つめていくのが特徴であるように、自分は捉えています。入門や総説以外にも、例えば調査や演習・ゼミなどの授業で、4学科や学年、また学部の別なく、いろいろな学生を迎えた形での授業

ができればよいなと思うのですが、先生方はどう思われるでしょうか。

A：そのようなあり方もあり得ると思います（野田）

【学科意識】

Q33：今日の話をして、地域学という学問自体、改めて「自分の生き方を考える」学問であると考えました。大学で学んだことを、いかにこれから「私」が生きていくことと結び付けられるかが、今後ずっと考えていくべき課題であると思います。そこで「政策学科はこういうことをすべきだ」とか「政策学科っぽい」とか「教育学科は免許が取ればそれでよい」とかいう議論は、極めて滑稽なものだと思います。あとは学生の「意識」の問題にすごくかかっているのではないのでしょうか？

A：その通りですね（野田）

【学科は不要】

Q34：地域学部のなかに学科を越えた単位認定の話も出ていましたが、地域学が学際的なものであれば、学科なんて要らないように思えてきたのですが、どうでしょうか。特化する分野というのは必要だし、システム的なことはあると思うのですが。あまり手を広げすぎると4年が短すぎて盲目的になってしまうとは思いますが。

A：学部全体といった「広く浅く」のみの勉強をさけるためには、学科という中心的な分野グループ構成が必要です。（藤井）

5. 授業について

【オムニバス授業の問題点】

Q35：教員の方は授業に一生懸命で熱意も伝わるのですが、1週間ごとに授業や先生が変わると、やはり授業のテーマがわからなくなります。一つのテキストを使うならわかりやすいと思いますが…。話のテーマが根本で一つだとしても、人が変わったり、内容が変わると、受けるイメージ・印象が変わるし、一つのテーマとして捉えづらいので、もう少しつかみやすくないかなと思います。来年もこんな感じでしょうか？

【授業配置の問題】

Q36：地域学入門から地域学総説の間（2年目）に、このような授業がないのはなぜですか？忙しいからですか？入門→総説への飛躍がすさまじいと思うのですが。

【4学科共通の授業について】

Q37：地域という言葉がもつ意味の幅広さ、奥深さを知るという意味では有意義な講義だったと思うが、4つの学科がタッグを組んで取り組める活動や実習などをしてほしいのだが、そういう授業開設の予定はないですか？

Q38：これまで地域学という分野を4つの学科の先生方が講義されたが、もっと地域学部全体の授業は実施できないんですか？より多面的な方向から地域というものを考えるのがいいと感じたか

らです。

〈上記の諸質問への回答〉

入門と総説の統一性など授業計画などをさらに練って行く必要があります。2年生では、他学科専門授業をとったり、実習で地域の現場を学ぶことを中心に考えています。4学科がタッグを組んで取り組める活動なども進めていますが、授業への組み込みなど改善が必要でしょう。(藤井)

6. 地域と教育について

【地域学と教育の関わり】

Q39：地域学と教育の関わりについて具体的に知りたい。

A：学校の中だけで考えるのではなく、地域（コミュニティ）の特性もふまえて連携して教育を進めていくことが、これからは必要だと思う。その典型がコミュニティスクールではないか。もちろん、これも広い視野を持つという位置づけで、教育学の方法論を獲得することも当然必要。(藤井)

【地域教育学科？】

Q40：地域政策・地域文化・地域環境学科という3つの学科は、確かに地域ごとに文化や環境が違い、地域ごとに様々な問題が存在し、だからこそ政策も地域によって違うと思うので、この3学科があるのはとても納得できたのですが、教育は私立でない限り、できるだけ公平・平等を目指していると思うので、地域教育という学科ができたことを疑問に思います。生涯学習を中心とするなら納得できますが、学校の教員を目指す学生がたくさんいるし、そのための授業も多く、実質地域教育というより教育学部（学科）ではないでしょうか。以前教育地域科学部があったから、そのまま残したイメージがあるのですが…。確かに、一盛先生がいわれるように、これからの教育に地域抜きではダメなのはわかりますが…。

【地域の現状と人間形成】

Q41：学校は自然村の期待する人間像とは違った人間像・生活習慣を村にもたらしたとあるが、その影響は結果的によかったのだろうか？そこから「村」のしきたりが厳しくなったり、学校の子どもと村の子どもとにいじめが生まれたのではないだろうか？「地域」が人間形成の上で重要な役割を果たしてきたと思われるが、今の子どもたちは「地域」との関わりが少なくなり、何により人間・社会形成されているのだろうか？学校、ゲームなどの情報？

【「学力低下」論の是非】

Q42：高校までの一般教育についてありましたが、それでは何のために一般教養をするのですか？

「学力低下」などいわれていますが、学力が低下することは本当に悪いことなのですか？（この講義だと、悪くないといえるのでは？）（「総合学習」「道徳や体験学習」の成果は、どのようにはかるのでしょうか。学力が低下したかわりに、そういったものの方があがったのかなと思い

【学校と地域との関係】

Q43：付属小・中学校は様々な地域から子どもが来ている。そういう場合、「地域」とどう結び付けてるのか？

【地域の教育力っていったい何？】

Q44：家庭の教育力とか地域の教育力とかいわれているけれど、地域の教育力とは具体的に何なのか。

【地域と教育力：教育だけではいけないのか】

Q45：「地域での教育力」といわれているが、現在、取り戻していくには具体的にどのようにしていけばいいのだろうか。教育だけでなく、文化や環境といった分野もやはり考えていかなければならないのか。

【どうしたら地域学を教育に活かすことができるのか？】

Q46：地域学部にしたことによって、教育学科からの視点だと、教育の専門的な部分が減らされ、地域学を学んでいる。なかなか少ない学部ということから、もっとそれぞれの学科に直接役立つような内容を学びたいです（他の学科は役立っているかわかりませんが）。教育として、どう活かしていけばよいですか？

【地域コミュニティで解決できるのか】

Q47：「地域の教育力」創造について、地域社会としてのコミュニティ形成が必要ということですが、周りが変わってもやはり本人達が変わらなければならないと思う。いじめや過保護すぎる親、教師の言うことをきかない子供など、最近の学校教育で起こっている問題は、地域コミュニティ形成によって解決することは可能なのでしょうか。

7. 地域学部と就職

【地域学と就職】

Q48：3年生になると、就職について考えます。地域学を学んだ私たちは、都市部へ地域学を生かした就職ができるのでしょうか？藤井先生は都市整備やタウン誌編集などと挙げていますが、研究に関わることはやはり無理なのでしょうか？

A：これから大いに道が開けるはずですし、道を切り開いてください（野田）

A：都市整備やタウン誌編集は、研究（地域学部で勉強したこと）に関わるとおもいます。地域環境も災害問題や町の自然などこれらの仕事にも関係しますが、シンクタンクやコンサルならもっと関連は深いでしょう。大学院修了が求められるかもしれませんが、また、一般企業に就職する人にとっても、たとえばマーケットや新規事業を分析・検討するには、地域特性の理解は欠かせないと思います。（藤井）

Q49：地域学を学問する学部生の中で、教育者でもなく、公務員でもない一般企業に就職する人にとって、地域学を学んで売り込めるもの、地域学を勉強するメリットは何でしょうか？

A：地域の特性は売れ筋商品の違いとなったり、現実に企業にとって地域性は非常に大きなファク

ターです (野田)

Q50：一盛先生の解説で教職に就かない教育学科の人もあるといわれましたが、教職のほかに実践して伝えられるような職種もあるのでしょうか。塾の講師とかが考えられるけど、あまり自分の修得したものを外に出してはいけないと思います。

(2007年10月5日受付, 2007年10月15日受理)